（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　　林　泰弘

本論文は，19 世紀の日本，韓国，中国における代表的宗教創始者，すなわち洪秀全，崔済愚，中山みきを対象に，その「神秘体験」を比較分析することを通じて，それぞれの宗教思想の特質に接近しようと試みたものである。論文は，全体で５部から成り，三者の神秘体験の性格，宗教学や精神病理学から見た体験の意味解析，その思想的位置づけなどが，原稿用紙 400 字詰めに換算して約 2300 枚という大部の作品としてまとめられている。

著者はまず第１部で，研究対象である三者の生涯と時代背景を紹介した後，第２部では現存する文献を整理・解釈することによって，各様の神秘体験の実相を丹念に記述する。そして第３部では，宗教学の概念や方法を援用しつつ，三者の神秘体験の異同や特質を多面的に分析しようとしている。これらの分析を通じて，著者は三者のトランス状態をそれぞれ「脱魂型」「憑感型」「憑入型」と類型化し，その「神観」や宗教思想の意味を検討する。さらに第４部では，宗教創始者の幻覚や妄想を精神病理学の用語で解析しつつ，三者の宗教運動や教勢の発展との関連が展望される。第５部は本論のまとめの部分であり，三者の神秘体験の分析を踏まえて，その思想的意味，とくに空間認識からみた国家観の本質が提示される。彼ら/彼女らの宗教思想における自他の関係づけや世界像のあり方は，三国のナショナリズムの質にも深い関わりをもち，ひいては西洋化という課題に直面した東アジア三国の社会文化の変容をも意味するものであったと，著者は結論づけている。

以上のように，東アジアの三国の重要な宗教思想家を等量の考察対象とし，それらを比較考量した上で，全体的見取り図を描き出そうとする壮大な構想を，本論文は内包している。しかも，中国語，韓国語，日本語の一次資料を大量に収集し，解読するという難行にも挑戦し，それを成功裏に果たしている。さらに，歴史学や思想史に加えて，宗教学や精神病理学の既存の研究成果を取り入れつつ，特定の歴史社会において宗教が立ち上がる現場を立体的かつ重層的に描き出そうとしたことも，本論文の大きな貢献に数えることができる。

ただし，対象に関する限定的な資料を各所で繰り返し引用したり，複数のディシプリンを用いたりしようとする余り，全体の論旨が些か明解さを欠く結果になっていることは否めない。また，著者の用いる方法や概念が厳格な定義を欠いたまま，曖昧に使われているきらいがないわけではない。分析に深みを欠く点も散見される。しかしながら，以上のような短所は，本論文の学術的な価値を損なうものではなく，研究対象・範囲の広がりと多面的考察への研究意欲がもたらしたものと考えることができる。よって，審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと判定する。